

# WINDOW ON WRIGHT'S LEGACY IN JAPAN

ライトと日本の窓



Taliesin, Spring Green, WI, 1911

## フランク・ロイド・ライト

Frank Lloyd Wright 1867-1959

二十世紀の革新的な建築家

ライトの母方の祖父は、自由を求めてアメリカに渡って中西部の開拓者となり、古代ウェールズのドルイド族の紋章「三本楔」を家の紋章とし、その意味する「世界に抗して真実を」を信条とした。ライトはその出身と信条を誇りとし、住居と仕事場に古代の英雄「タリアセン（輝く眉）」の名を借りました。

父は、自己を教育することを好んで医学と法律を学んだが失望し、天の声に従って牧師となり、音楽を慰めとし、教えた。幼いライトは夜ふけて父がバッハやベートーヴェンを弾くのをベッドで聞いて育ち、父に交響曲が音の建築であることを教えられたという。ライトもまた音楽を生涯の友とした。

母は、教育こそ人間を闇から神の御前に引き上げて、美の宝庫を開くものと信じ、息子が建築家となることを望んで、フレール式の幼児教育を与え、少年になると叔父の農場に送って働かせた。後に、フレールの教育玩具の幾何学的の基本形による訓練は、定規とコンパスによる設計製図を容易なものとし、農場での生活と仕事は、自然や経験から学ぶことを教えたという。

ウィスコンシン大学に建築科がなかったので土木科に入学したライトは、卒業を待たずにシカゴに建築の修業に出て、シルスビーの事務所に入り、サリヴァンの事務所に移った。

当時のアメリカは、南北戦争が終って、社会的に、経済的に、また科学技術の面でも躍進した時代で、中西部の工業

都市シカゴではいわゆるシカゴ派の建築家たちが高層建築に挑み、鉄骨構造やエレベーターやガラスの新しい技術や機械や材料が開発され、発明されていた。しかしほとんどの建築家が在来の様式の中に留まっていたが、サリヴァンは古典様式から脱して独自の方式で建てていた。

ライトは、サリヴァンの「手の中の鉛筆」として六年ほど働き、サリヴァンの有機的思考を学んで、1893年に独立した。最初に建てたウィーンズロー邸は、サリヴァン風に平面的な美しさを求めた壁面構成にライト独自の安定感のある屋根を載せたもので、その典雅な魅力ある姿を見て、シカゴ建築界の大立者ダニエル・バーナムがパリ美術学校での研修を勧めたが、ライトはサリヴァンの教えに従うと言って断った。



Willitts House, Highland Park, Illinois 1901

二年後の1895年のシカゴ万国博で、サリヴァンの建築がパリ美術学校の金賞を得るが、バーナムの推奨する古典様式が大勢を占め、その後の建築界でも支配的であった。

19世紀に発達した工業都市に新しい市民層が現れて、子供を自然の中で育てたいと郊外に移り住み、合理的で簡素な生活を求めた。その人たちの家を建てたライトは、無駄な屋根裏や間仕切りをなくし、装飾的な細部をやめて、室内空間を開放的で自由なものとし、平原では高さが目に立つと言って、屋根を低くかぶせ、軒を大地に平行に伸ばして大地との親近感を得て、「平原住宅」と名づけた。



Larkin Building, Buffalo, NY, 1904

同じころ建てた「ラーキン・ビル」とユニティ教会堂は、ガラス屋根から光を入れる吹き抜き空間を中にして、各階をバルコニー状に四周に設けて、全体を一つの内部空間とし、外部は、ほとんど装飾のない壁体を四周に立ち上げ、閉じた箱とならないように四隅を空けている。

ドイツからハーバード大学にきた美学の交換教授のクノ・フランケが、それらの建物を見て、アメリカではまだ理解されないがドイツなら評価されると言って、ドイツに行くことを勧め、それらの建物と計画案をまとめた「図録」がドイツで1910年に出版されるように計らった。ライトは、私生活も破綻し、仕事の転機を予感したか、仕事も家庭も捨てて、新しい伴侶の女性とともに旅立った。

ドイツでは、ライトは「アメリカのオルブリッヒ（分離派の建築家）」として紹介され、出版された「図録」はドイツだけでなくオランダやチェコなどの革新を望む建築家たちに大きな反響を呼び起こした。

しかし、帰国したライトは、続く私生活のスクランダルのためにもあって不遇の時期を迎えるが、その二十年ほどの間に、生涯の住居と仕事場となる「タリアセン」を建設し、何度か日本に滞在して「帝国ホテル」を建て、晩年の伴侶オルギヴァナ夫人の協力を得てタリアセンに生活と仕事を通して建築を学ぶ学校を設け、また、独自のコンクリート・ブロックを考えてカリフォルニアとアリゾナに美しい住宅を造り、ホテルを計画し、さらに都市の分散化を主張して、一世帯の住居に1エーカーの土地を割り当て、農業と都市の文化施設を組み合わせさせた地域計画「ブロードエーカー・シティー」を著書と模型展示によって提案している。



Imperial Hotel, Tokyo, Japan, 1912-23

ライトの「図録」が中欧諸国の建築界に衝撃を与えて十年ほど後の1920年代の初めに、オランダのデ・ステイルやドイツのバウハウス、フランスのル・コルビュジェなどの革新的な建築活動が現れた。十年して、1932年に建築史家ヘンリー・ラッセル・ヒッチコックと建築家フィリップ・ジョンソンがそれらの建築作品を紹介する「近代建築展」をニューヨーク近代美術館で催した。

その折に出版した論著「国際様式」で、これからの建築はヴォリューム（立体）を扱い、主導的な建築家はル・コルビュジェ、ミース、オウトであると論じた。すなわち、ル・コルビュジェが1923年に発表した建築書で「建築は光のものとヴォリューム（立体）の操作である」とした説を受け入れ、白い幾何学的な形と金属枠ガラス張りの建物を国際的に通用する「近代建築」と見たのである。

ライトは、六年後の1938年、「フォーラム」誌に「落水荘」など近作と計画案を載せて、建築活動の復活を示し、その前書きに、ル・コルビュジェの提唱する幾何学的抽象形に対し、自らの建築を有機体（草や木など生活機能が形づくるもの）になぞらえて「有機的」と呼び、その有機的建築が基づく「全体の感覚」は「敷地の感覚、シェルターの感覚、材料の感覚、空間の感覚、比例の感覚（生得のもの）、秩序の感覚、手段と方法」になると述べている。

この20年後、92歳でなくなるまで鉛筆を手放さず、数々の名作を創り出す。タリアセンの壁に、「家の実在は住むための内の空間にある」と老子の言葉が刻まれ、しばしばライトは鉄筋コンクリートの持ち出し構造による建築空間のロマンを語った。

「落水荘」は、室内空間が開くバルコニーを三層、手すり壁と床が一体の持ち出し構造によって谷川の上に張り出して、均衡の取れた姿を斜面の繁みに適合させ、グッゲンハイム美術館では、ガラスの丸屋根から光を入れる大きな吹き抜き空間の中に、手すり壁と床が一体の持ち出し構造を周囲に渦巻き状に立ち上げて、組積造でできなかった宙に浮く床を何層も重ねて実現し、光の中に静かに連続して流れる安定した建築空間を展開した。



Fallingwater, Bear Run, PA, 1935

アメリカの標準的な家族のために、ライトは、簡素な造りながら、室内空間が庭に開き、暖炉のある、住み心地よく美しい小住宅を工夫して「ユソニア住宅」と名づけ、敷地の状況や材料に応じてさまざまな家を立て、また、碁盤目や正三角形、正六角形の網の目、円の放射線割などを基準単位としてプランを展開して、さまざまな住空間を試みた。



Kraus Residence, Kirkwood, MO, 1951

自由を求めて渡来した祖父たちが新世界を開拓したようにライトは新世界に自由な住空間を求めて、まず伝来された旧世界の古典様式から脱し、後に西欧近代から輸入される国際様式に抗して、有機的建築を開拓し、展開した。

地中海精神の普遍人ール・コルビュジェの、高層建築に業務と住居を集めて周囲に緑地を創り出す「輝く都市」が幾何学的精神の生んだ科学と双生児の抽象美術とすれば、ライトの独立住居に土地を割り当て農地に文化施設を配置する都市分散化「ブロードエーカー・シティー」は、個人の自由を尊ぶ民主主義から近代産業都市への文明批判であろうか。

ライトが生涯かけて求めた建築と建築原理を集めた最後の著書「遺書」の結びに、「われわれの民主主義の天才は、これまでどの文明もよく知らなかったものを深く知ることであろう」と記している。遺書はその手引書であろうか。

—フランク・ロイド・ライト  
二十世紀の革新的な建築家—  
(樋口 清 ひぐち きよし)